

小田原史談

第19号
談会
原史
小田
所
發行
小田
郷

真説曾我兄弟 (五)

中野敬次郎

一〇、曾我氏の後裔と曾我系図

建久四年富士巻符の仇討以後の伊東、工藤両家の動静とその子孫については前述したところであるが、一方曾我氏について言えば、曾我十郎祐成・五郎時致兄弟は、二十二才と二十才の若さで富士山麓の野末に花と散って、兩人に子なくして後は絶えた。「異本曾我物語」によると、十郎・五郎の母万劫御前は曾我太郎祐信のところに嫁してからも三人の男子を生み、今若・鶴若・有若と名付けられたことが記してあるが、このような記録や資料は他のものにはなく、その子孫と伝える家柄もないのであるから、万劫御前は曾我の里に嫁してからは子供を生まなかったと考えるのが正しいようである。

鎮守府將軍村岡五郎平良文七世の孫

祐家 曾我太夫
初めて曾我に住む

祐信 曾我太郎
源頼朝に仕う

祐綱 小太郎

祐重 太郎 祐盛 孫太郎 祐時

由奥太郎 下曾我
久明親王に仕う 神保氏

小太郎 守邦親王に仕う 師 助 太郎左五門、上野介
足利尊氏に仕う
周防国与田保の荘を領す
法名道行

氏 助 小次郎、美濃守、兵庫助
足柄義詮に仕う
備中国浅井郷を領す
法名道昌

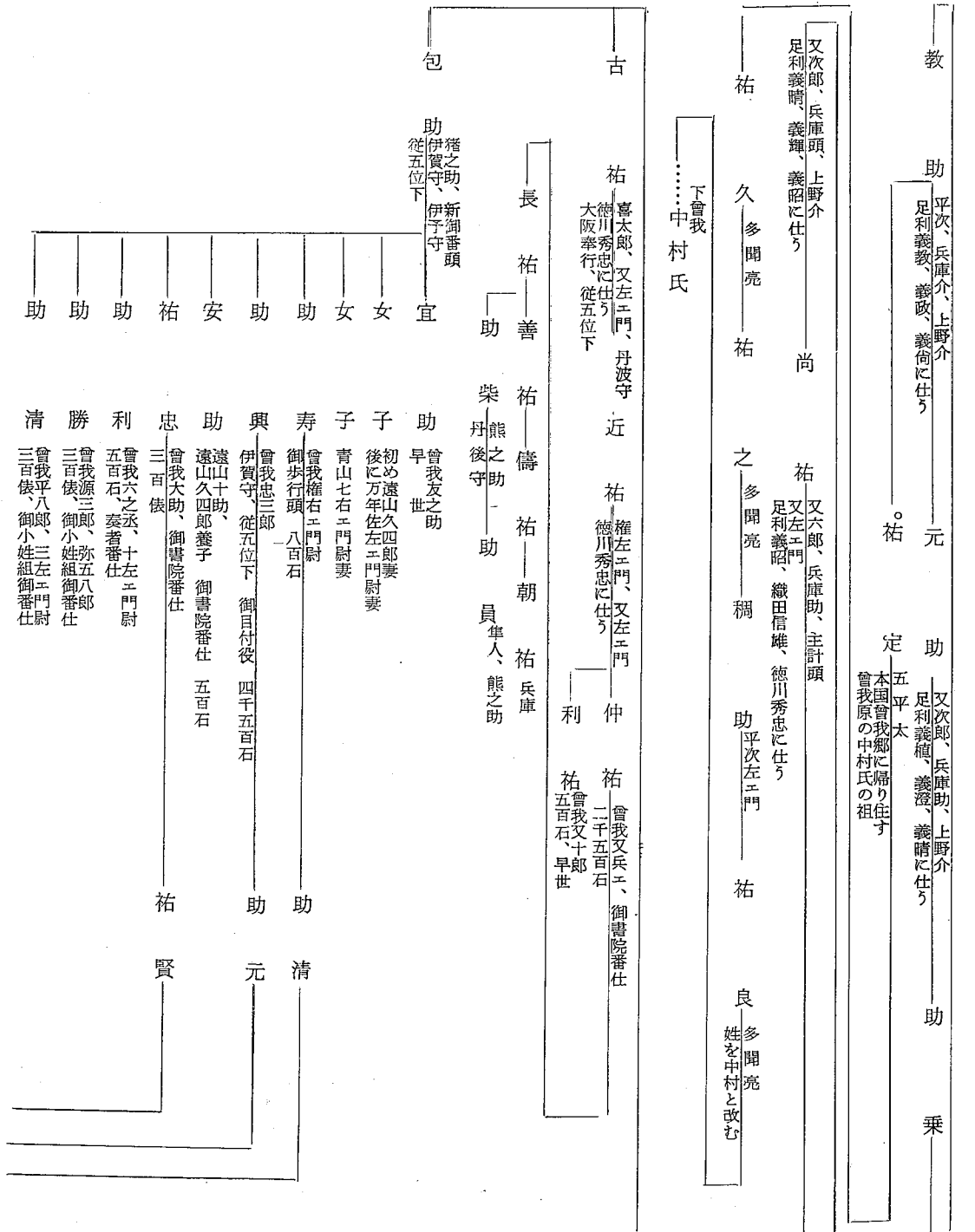
満助(清助) 太郎平次左五門、美濃守 政助 太郎平次左五門
足柄義満、義持、義量に仕う

また今も小田原の曾我原に住む曾我氏系の旧家中村氏の牌記の中に「平塚入道信之殿。曾我十郎祐成一男也」とあって、これによると十郎祐成に一男子があることになるが、彼の愛人として知られた虎御前に子供を生んだという所伝もないので、果して如何なる女性の産んだものであろうか。

強いて言うならば十郎も五郎も、まだ正式には結婚をしていなかったけれども、富士山麓で仇討を果して、自らも散った時の年令は、元服も済ませて数年後の二十二才と二十才の血気の青年期であったのだから、当時の社会状況から考えれば情交を重ねた女性の一人や二人は有ったであろうことは想像のできることであるので、世に知られていない隠れた子供があったかも知れないのでこの記録は否定できないことであるが、毛を吹いて虎を起すような推測はさげることにして、十郎・五郎の曾我兄弟には子孫なしということを進めて行きたいと思う。

しかし、曾我氏には子孫があつて、一族多数に分れて繁栄した。曾我太郎祐信には先妻の産んだ三人の男子があつた。「異本曾我物語」に、祐信が晩年に三人の子孫に所領を三分して与えたことを記しており、曾我氏の子孫で知られた下曾我各津の神保家の系図にも、祐信の子として六子を挙げ、養子の十郎祐成・五郎時致の外に、長男は小太郎祐綱、次男は三郎祐次、三浦合戦討死、三男は加茂治郎祐兼、分家、末子に女子、早世の記録があるのは、何れも先妻の生むところのものであるが、父の跡を継いだのは、曾我小太郎と称せられた祐綱で、後世の曾我氏を名乗る家柄は、皆この祐綱の子孫ということになっている。

祐綱の後裔は多数の家柄に分れたので、系図も伝えられているものが種々あつて多少の異同もあるので、諸家所伝のものや「群書類従」や「寛政重修諸家譜」などを校合して、一本の系図を作つて参考に供すると大体次のようになる。



祐弘助 章助 諸助 弼初名祐求、鉄次郎
 助有助 馬助 造助 猷助 順忠三郎
 孝助 寛助 彭助 助 義助 裕友之丞
 伊予守

さて、曾我氏一族は小太郎祐綱が父太郎祐信の後を継いでより数代の間は曾我郷を領有して鎌倉幕府に仕えていたが、鎌倉幕府が滅んで南北朝時代になると祐綱六世師助のときより先ず足柄尊氏に仕えて北朝方として各地に転戦し、次いで足利氏によって京都に至り幕府が開設されると、代々の將軍家に仕えて幕府の要職につき近衆となっているので、一族の大半はこの時代に京都に移ったのである。かくて室町時代の後半期までは一応大名格を失わなかったけれども、応仁の乱と戦国時代の動乱に終始巻きこまれた形となって家運が衰えた。

祐綱より十二世尙祐のとき悲運の將軍足利義昭の幼少より没落までこれに仕え、後に織田信雄に仕えたが、天正十八年小田原陣のとき信雄が豊臣秀吉の怒りに触れて秋田に虜流になったので、またこれに従って東北の僻地に移り、秀吉が後に信雄を四国の伊予に改遷したとき供奉者十四人中の一人となって更に西辺に移り、後は彼の忠勤がめでられて秀吉の命によって関白秀次の家来となって領土を賜ったが、幾ばくもなく、また秀吉が太閤の怒りを買って自害を命ぜられて滅んだので、このような相次ぐ不運に家運傾き、老後にして漸く徳川二代將軍秀忠に奉勳する身となって江戸に安住の地を得たが、これ以後の曾我氏一族は家格は旗本以下に落ち、祿高万石に至る者なく元祿の頃曾我忠三郎助興が従五位下伊賀守となり四千五百石を食んだのを最高とし、余の人々は幕末まで五百石内外を往來するに過ぎなかった。尙祐の子供に古祐、包助があり、古祐が嫡家を嗣いだだが、この子弟が更に二家に分れ、また弟の包助は才人であり子福者であって、八男一女を生み、長男宣助は早世したが、七人の男の子には各々士分の家をたてさせたので、徳川旗本の士家には曾我氏を名乗るものが多かったのである。

この外、現在は曾我の系統の家柄は日本全国各地に分布しており、九州、奥羽地方には多い。明治時代陸軍で活躍した(陸軍中將)子爵曾我祐進氏は旧柳河藩士であった。

さて、曾我氏は郷土に土着して今日まで家系を伝えた家柄も少くはないが、昔から知られているのは曾我谷津の神保家と曾我原の中村家とである。神保氏は「新編相模風土記」にも「旧家八左エ門」として特に掲載されている程で、鎌倉時代の曾我氏全盛期から今日まで曾我郷を出ることなく土着してきた家柄である。同家に伝える一巻の「曾我家系譜」というものについて由緒を略記すると、曾我太

夫祐家初めて居館を開いて曾我郷に住したが、長男祐重早世し、次男祐信・三男祐吉の兩人は源頼朝の軍に従って各地に転戦し、上総国若宮八幡宮において祐吉討死し、祐信も重傷を負うて治承四年九月一日曾我の館に歸り住し病を養つて父の跡を継ぎ曾我太郎と称した。やがて頼朝幕府を鎌倉に起したので祐信またこれに仕え養和元年二月本領安堵の將軍教書を賜わり、これを嫡男小太郎祐綱に譲る。祐綱以来子孫相承けて曾我の領主として栄え、大森氏が小田原城に廻った頃は家老職をもつとめていたが、大森氏を倒して北条氏が興るに及び祐綱十二世民部大輔信正のとき永祿二年四月一日時の武將の命に背き兵を交えて利あらず、大手の守將神保利部流矢にあつて重傷して曾我城に歸城し、最早落城止むなしとて自刃をすすめたので城主信正自害、一族一党或は討死、或は自殺して、僅かに信正夫人と一子甚九郎祐吉のみ、難をのがれて生命を全うした。

この事件以来武家としての家運が保てなくなったので、民間に下つて帰農し神保氏を称した。帰農第一世の甚九郎祐吉は天正十九年五月八日に没したが、子孫数代は、旧曾我城址、池澤などを盛んに開発し代々名主役を勤め一家繁栄の基礎を固めた。祐吉の子祐次は八郎左衛門、孫の祐広は八左衛門と称したが、これ以来代々の当主が、八左衛門又は八郎左衛門と名乗ったので、名家「八左衛門家」として近郷に聞えていたのである。

この「曾我家系譜」によると、永祿兵火の際に家宝多く烏有に歸したし、この系譜も半ば焼亡したので、改めて伝写したものである由を書き加えて、なお研究の余地ある系譜であり、例えば永祿二年四月の兵火については、時の將軍の下知に随わなかったので、曾我城を攻められて落城したと記してあるが、当時の小田原地方は北条氏康の時代であるので、時の將軍とは氏康を指すのであろうが、曾我の地に兵乱のあったことは、何等他に証拠とすべきものがなくて疑わしい。何れにしても、神保家と他の曾我氏との系譜関係を見ると、曾我太郎祐信より四世の曾我孫太郎祐盛の子に祐由・時勝の二子があり、兄祐由の子孫が最後まで曾我城を守つて後に故郷に土着した神保家となるので、弟時助の子孫が足利將軍家に仕えて京都に出て、後に各地に分岐する曾我氏となるのであつて、神保家は本来、曾我太郎祐信の嫡流の名家なのであつた。現当主神保正平氏は、中祖甚九郎祐吉より十六代目、遠祖曾我太郎祐信より二十九代目にあたる。

○曾我谷津在佐氏系図

家 曾我大夫 祐 信 曾我太郎 祐 綱 小太郎 祐 重 太郎 祐 盛 承太郎

祐 由 祐 政 太郎 祐 永 民部 祐 守 小四郎 祐 久 小太郎

時 助 (旗本、曾我氏祖) 祐 春 式部介 祐 高 兵部 祐 氏 左馬之助 信 正 民部大輔 祐 吉 甚九郎 美ハ南条氏清の子 耀農した神保氏を従す

祐 次 八郎左エ門 祐 広 八左エ門 祐 一 五郎兵衛 祐 頼 八郎左エ門 祐 直 八郎左エ門

広 次 八左エ門 祐 春 八左エ門 祐 安 富太郎 名を広房と改む 祐 房 兵十郎 祐 吉 八左エ門

祐 長 八左エ門 祐 重 富太郎 祐 明 久太郎 祐 忠 忠太郎 見宗哲二男 正 平 現当主

次に、曾我原の中村家について見ると、この家柄も曾我氏の子孫の立派な系譜を持つて居る。

中村氏は神保家の如く初めから終始故山の曾我郷に土着していた家柄ではなく、足利將軍家に仕えて一旦京都に移住した曾我氏の子孫であつて、後に再び故山に帰住したものであつた。

家伝の由緒によると、曾我太郎祐信の嫡男曾我小太郎祐綱より相伝えて六世して左衛門尉師助に至つて足利尊氏に属し、その子兵庫助次助(流布曾我系図には氏助とある)氏助の子美濃守満助は初め清助と称していたが將軍義満に仕えて軍功により、將軍の諱の一字を賜つて満助と名乗り、本領の外に周防国与田保荘を領した。その子平次左衛門政時(時)のとき、將軍義尚・義持・義量に仕え相模國曾我郷より京都に移り住んだ。政時の子兵庫助教助も善教將軍に近侍して、その偏諱を賜つて教助と名乗つたのであるが、教助の子兵庫助元助のとき、その弟に五平太祐定という者があつて、兄と祐信より二十八代目となる。

○曾我原の中村氏系図

祐 家 曾我太郎 祐 信 曾我太郎 祐 綱 小太郎 祐 重 平太夫 祐 盛 孫太郎

時 助 奥太郎 時 之 小次郎 師 助 左エ門尉 次 助 小平次 (流布系図は氏助)

満 助 美濃守 政 助 平次左エ門 京都に移住す 教 助 兵庫助 元 助 兵庫助 助 乘 (流布曾我氏系)

分れて祖先の地相模國に歸り曾我原に歸り來つて永住することになつたが、當時は小田原北条氏の全盛期であつた。祐定は中村氏の中興の祖であるが、天文七年六月五日没した。

祐定の子は曾我彦岐守祐久、祐久の子は多聞祐之、祐之の子は平治左衛門尉助、助の子は多聞亮祐良である。祐良の時代には豊太閤の小田原攻めの大事件があり、北条氏滅亡して大久保家が小田原城主となつた政治上の変革期であつたが、祐良はこののである。相当の郷土的な資格を捨てて完全に帰農し、曾我姓をも改めて中村氏を名乗つた大庄屋となつて、確固たる家運を築いたのである。かくて神保家と同様家系連綿として今日に至つたが、現当主中村祐忠氏は中興祖五平太祐定より十七代、遠祖曾我太郎祐信より二十八代目となる。

祐 久 彦殿守
祐 之 多聞
祐 助 平次左門
祐 良 多聞亮
祐 治 甚兵衛
祐 定 五平太
曾我に帰住す

資 祐 左五兵衛
自 祐 左五兵衛
繁 時 左五兵衛
信 繁 左五兵衛
祐 兄 伊忠太
祐 忠 現当主

祐 傳 貞吉
栄 造
菊之助
祐 光
潔
祐 忠 現当主

なお、中村氏の系図についても神保氏系図と同様に調査の余地が残されておいて、中村氏の曾我帰住についても、曾我兵庫助元助の子助乗、助乗の子彦殿守

祐久のとき京都より曾我郷に移ったことになっていて、五平太祐定という人物を除いては別名もあるので、この点についても十分研究する必要がある。

助郷について

輿水正光

郷土文化館で古文書収集に

つとめている折柄こゝに珍

しくも安永八年の定助郷、

加助郷の石高村名附帳が発

見された。その内容は安永

亥年と子年に涉って、助郷

加助郷の石高が村名別に書

かれ更にこれを区分し小計

と総計がしてある。これは

小田原藩領内は勿論街道筋

の助郷研究にとって貴重な

資料である。次にこの一部

を掲載して江戸時代に於け

る小田原宿の助郷の一端と

街道に発達した助郷の起原

と沿革について調べてみよ

定助郷亥年勤番

一、三百八拾石 小八幡村

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

一、百拾石

同国足柄下郡
一、五拾七石 福浦村
一、五百貳拾九石 吉浜村
一、貳百九拾九石 門川村
一、貳百七拾八石 真鶴村

た。小田原の宿場は百人百匹の定によっていたが、不足した場合近在の村に費用を割当て、人馬を増すしくみになっていた(定助郷・加助郷) 国府津の場合、石高千二百石に対する年貢米の外に、九百五十石の助郷高を加算せられていた云々と述べてある。江戸時代街道筋の宿駅助成として伝馬役夫を出さしむるために特記してあり、更に元和五年四月中山道の駅伝未だ整頓せざるを以て、各駅常備人馬を置く能わず沿道領主代官及び郷村に課して人馬を出さしむ、其法知行毎高百石に詰夫一人、毎高百六十石に伝馬一匹、馬夫一人、諸郷は一年六人六匹を徵せしむ、これを其の起源とす。

(以下略)

江戸時代の交通についての文獻は数々あるが、市の教育研究所で且て「郷土教育資料おだわら」を発行したその中の宿場町時代の交通のところ、江戸時代参勤交替の制が布かれ、小田原は箱根八里越えの入口として西の三島宿と対応した。

また架橋を禁じられていた酒匂川の渡頭聚落として云々、小田原宿の間屋場は常に人夫百人、馬百頭を定数とした。これらの人夫の活動範圍は、東は大磯まで四里、西は箱根宿の四里八丁時に三島まで八里の間、人夫と駅場を継ぎ立てていっ

寛永元年十一月中山道太田川助郷船のために、高三千三百四十三石余の郷村を付属するに至って始めて助郷の名あり、明暦三年四月各駅に令し馬及び助郷馬を定備し、時々其通伝の遅滞なからしむるに至って助郷の制度始めて定る。万治元年十二月、駅伝其付属の助郷を酷使し助郷これがため付属を肯せざるに至るを以て、宿駅及び助郷に命じて誓詞を呈せしむ。(中略)

延享四年四月沿道領主代官に令して助郷人馬を監督せしむ曰く「近來助郷人馬の使用多し、頻りに其愁訴を聞く、沿道領主代官宜く其下吏を出して卒然駅伝に入り、其人馬日縮帳を査検し、又其先触に照して正否を札すべし、又助郷諸村皆総代人を撰びて其駅家に出し、日々受領する所の人馬賃銭を以て駅伝の日縮帳に記入せしむべし、又駅伝に於て助郷人馬を召集せんと欲すれば、宜く先ず先触書

の副本を以て助郷總代に示すべし助郷諸村も亦老人廢馬を出して僅に其数の充す等の事あるべからず」と、又同年各駅火災にかかるを名として助郷を苦役することとを禁ず、天明七年正月東海道線各駅助郷に命じて誓詞を呈せしむ、近來其事中絶するを以てなり、慶應三年十月各駅助郷及び当分助郷の課役を解く、降りて明治元年三月、海内一同に助郷勤むべき旨を布告し、同年六月に一般を助郷に組み込み凡東海道に七万石、中山道に三万五千石、脇街道に一万石程の見込を以て附屬せしめ、京都には伝馬所を設けて助郷十三万石を附屬せしめ、又諸道助郷總代等の名称を廢し、新に伝馬所取縮役を置く、其後屢々組替或は改正する所ありしが、五年正月陸運會社を設置して助郷を機すとの當館はこれを機会に此の方面の資料の収集につとめ郷土の文化面に一層の研究をすめたい。

山県有朋の晩年とその死 (2)

勝野 憲 一

そして、ついで山県と会談して、同趣旨のことを述べたが、山県はこれに対して、宮中関係の問題をはじめ大問題を控えている折柄引つづき政局を担当することをきいて自分は安心したと答えた。なお、この年の秋頃、山県は新橋山荘で病臥していたが、彼は警視庁が社会主義者の家宅捜索を行つて押収した書類をまとめたものを杉山茂丸に示して、自分はこれだけは是非ともと思ひ、医師、看護婦の制止をきかずに目を通した。この中には、一度読んだら忘れようとしても忘れられぬことが沢山書いてある。自分は軍服を着て彼らと戦つて死ねないのが残念でならない、と昂奮して語つた、という。

一月三日には、山県は東京から小田原の古稀庵に帰つた。そして、その夜から発熱して床についた。翌四日の夜、原首相は関西に赴こうとして東京駅にいた

を憤る一青年のために駅頭で刺殺された。病床でこの凶報をきいた山県は、原の辞意を自分が容れていたらこのようなことにならなかつたらうにと痛嘆したといふ。そして、翌日に病床を訪れた松本にむかつて、原は「政友会の俗論党及び泥濘等に殺されたのだ」といふ、原の「勤王家」であることは自分も見抜いていた。実に残念に堪えないといつて、涙を流した。

原の死とともに、後継官班の問題が起つた。西園寺公望は松方正義と会見した後、山県の病床を訪れたが、山県はその際西園寺の蹶起を強く求めたが、西園寺は固辞した。その後山県はさらに平田東助を代理として重ねて西園寺に交渉したが、西園寺は翻意せず、しかもこの会談においては西園寺は高橋是清の名を出した。結局山県も松方、西園寺が協議して高橋を適当と考えらるならば、自分に異議はない旨を表明した。けれども

この間の使者に立った秘書官入江貫一にむかつて「又泥濘共の延長か」とも呟いた。ともかくも、このようにして、高橋内閣が成立をみた(大正一〇年一月)なお、この内閣のできた直後、皇太子の摂政就任が実現した。

山県の病氣は快方にむかわなかつた。一二月に、彼は松本に語つて「近頃は明治天皇や今上天皇並に摂政宮殿下の夢と原の夢を能く見る。摂政宮の世評がよいのをきいて、自分ももう死んでもよい。世間では自分のことをとかくいっているようだが、自分は皇室と國家のほかに子や孫などとは念頭にない、といった一月のある夜、眠つていた山県は夢をみたもののように、大声で「何んだ。馬鹿殺して仕舞へ。馬鹿な。馬鹿な」と叫び、松本剛吉の名を呼んで、目を覚ました。そして、枕頭の勝野軍医正に、今原の殺されたときの夢をみた。原は実に偉い男

だった。あのような人物をむざむざと殺されては、日本はたまったものでない、といった。山県はまた、病床で入江貫一にくり返していった、「維新以来わが日本は絶えず苦心を要する境遇に置かれ、殊に非常な困難にも幾度か際会して来たが、幸にも殆んど常に予期しない国運の開展を見て来た。しかし、向後は困難は益々加わつて来るに相違ない。而も其困難は従前に比し数倍するものと思われるが、それを如何に処理して行けばよいか。自分共は最早老年で国事に尽すことは出来ないが、将来局に当るものは十分の覚悟と決心とを以て事に當つて貰いたい。一月末に、山県の病状はまったく險悪となつた。三

一日には小田原にも雪が降つた。山県は病床からそれを眺めながら「雪が降つて寒いだろう」と傍の医師に呟いた。翌二月一日には、まったく危険に陥つた。天皇・皇后から贈られた枕頭の鉢植の蘭の花がこの日音もなく散つたとき、妻貞子は「賜わりし蘭の一片散りにけり君のみたまも去らんとすらん」と詠じた。午後

一時四〇分山県は死去した。山県が危篤に陥ると、特旨をもって従一位に叙せられ、また外孫有光に祖父の功勞をもつて男爵が授けられた。二月三日、国葬の御沙汰あり、七日に天皇からは勅使をもつて誄詞が贈られた。それにいう「忠純志ヲ奮ヒテ大業ヲ維新ニ賛ケニ翊ク。功ヲ陸軍ノ宏制ニ致シ、既ニ武ニシテ且ツ文ナリ。力ヲ自治ノ良規ニ竭シ、出テテハ將、入リテハ相タリ。勤誠久シク著ル。維レ國ノ元勳、位望竝ニ隆ク、時ノ碩老ト為ス。股肱是レ頼リ匡輔是レ須ケシニ今ヤ澁亡ス。曷ゾ軫悼ニ任ヘム。茲ニ侍臣ヲ遣シ弔ヲ齎シテ臨ミ弔セシメ、以テ哀寵ヲ昭ニス」。

二月九日、葬儀は国葬をもって日比谷公園で取り行われた。当日午前一〇時品川沖に碇泊した軍艦から十九発の弔砲が轟くとともに文武の高官の参列の下に葬儀が挙行されたそして遺骸は、小石川護国寺に葬られ枢密院議長元帥陸軍大將一位大勲位功一級公爵山県有朋之墓という墓柱がその上に建てられた。明治から

大正にかけて、そして、この伊藤博文の死後わが國の政界に正に君臨したといつてよい山県がその位人臣をきわめたことを、この墓柱の文字は示している。彼は天皇制の上に自己の巨大な勢力を構築した点において、明治の政治的伝統を身につけた政治家であつたといつてよい。山県の死後なおそこに残つた二人の元老の中、松方はすでに高齢であつたのみならず政治的能力を欠いており、西園寺は思想において山県、松方とは異つていた。かくして、山県が小田原で八十五年のその生涯を閉じた際、わが國政治における明治の伝統は、大正もその末年に近づいてきたこのときに、その日の古稀庵の庭に残る班ら雪のように静かに消えて行つたのである。

彼の死んだ日、夜に入ると風は凩いで、遠い波の音が古稀庵に忍び込むように聞えて来る。当時ある新聞は、その夜の古稀庵の風色をこのように記している。彼の死とともに、しかし、政治の世界においてもまた波の音は一層はつきりとききとれるようになった。新

しき時代の潮騒であった。けれども、このひらかれつつあった新しい時代もわれわれの日本を光明の中へ導くものではなかった。そのことを、われわれは今日

では知っている。終
(敬称を略す)

春 寒

城北史談会
若杉 一所

料峭風寒春不_レ春。
晴窓喚覚鳥声頻。
日三竿底尚慵_レ起。
浅夢重簾疎懶人。

舟原の語源について

久野史談会 磯崎 憲次

足柄の安来奈の山にひこ舟の

あとひかししよこはこがたに

これは万葉集、巻十四の歌で、かつて日大講師若原先生が久野にお住居になられると聞いて早速訪れてこの歌の意味について次のように伺った。

「足柄の安来奈の山にひこ舟」こまでは歌の修飾語で序の詞で歌の意味は、曳く舟のように後から曳かれるような思いが大へんしますのは、お別れして来たあなたのためですよ(安来奈の山が舟原のどこかにある)と、教示された。

又、京都の山田弘通氏が突然私宅を訪問された時のことであるが「舟原に安来奈」という山がありますか」といろいろと地形や昔からの

この若原・山田岡先生の御意見から何とか安来奈の山の所在を突きとめようと地形・伝説・古老の聞き込み等により割出しに努力した

結果、安来奈に類似した山を見出したのである。舟原部落より約一千メートル北の高尾山の一部にオオキベラという山があることが判った。ペラとは斜面の意でアキナールオギナールオキと時代と共に変化したとも考察される。尙同一名が兩足柄町矢佐芝部落にもある。

さして、これが万葉集巻十四の歌に合致するかは先輩方の判定を待たねばならぬ問題である。舟原部落の西、和留沢より更に一キロに位置して負沢・熊の木沢の山(箱根外輪山の尾根に近い所)に巨木の切り株の点々と残っている所があつてその気質は樅・ブナ・杉の類と思われ直徑約二メートル半から三メートル程の太木であろうと推察されるも

のである。昔時は草刈場と称して年毎に山焼きをして良質の草の繁茂を育成したもので筆者も青年時代に度々参加したことがある。今思い出すと、大木の根もとに火がついて消火に苦勞したことなどあつた。このようにして切り株は山焼きのために炭化されて永い年ごとに保存出来たことであらう。(現在は官行造林のため見学困難)悪沢の谷に神代杉の露出していることを思うにつけ、往時これらの巨木が大地を圧して繁茂しておつたことであろうと推察できる。

さて舟原の語源に関しては学者間にもいろいろ論ぜられてはいるが、一方舟原というのは造舟所の有る所で、これに用うる材木は悪沢・熊の木沢方面から搬出されたことになるが、歌の意味からどの程度関係があるかと考へるに、若原先生は序詞といわれるし、筆者の調査ではオキナの山と大木の搬出路とは大分無理があつて結び付かない地形だと思われる。勿論丸木舟で原木の搬出には相当な努力を要するので、わざわざオオキナまででは行かれないことと

思われる。

安来奈の山の割り出しには未だ未だ研究の余地が多分に有つて、断定は尙今後の調査・研究にまつところであらうことは今日では恐らく否定する人はない。四千年の昔は比の舟原に近い留場(現在久野の部落名)のあたりまで相模湾の波が寄せていたのが、太平洋岸の隆起は年毎に一メートルの高さを加えて現在の姿に化したもので、更に欠の上(現在久野の部落名)の南、久野川の深い谷のあたりは昔、舟原部落に通ずる有利な入江が運河を形成していたとすれば舟原は舟の取引所であり運河の利用によって益々発達してきたことは容易に理解できる。尙一説には舟原の呼称は地形上から論じて、西方が先で東方が、ともに当るといふが、これは山頂での直感的なものと思われる。

住み馴れた舟原の部落は近年戸数も追々と殖えてきた不思議なことに、これら部落の家並は何れも道路に添って疎らながらも連鎖し、これによって、あたかも舟の形をしている。星霜は幾

第 19 号

小田原信用金庫

集う友等のあたたかに

雪しまき 広沢十五夜

白雪凱々_レ到俄興 説話不尽温泉和

百済往昔參証良 豆相史談会強羅

豆相史談会総会で 二月九・十日 清水専吉郎

以上舟原の語源について、読者諸賢の御意見をお聞かせ下され御教示を仰ぐことが出来ましたら真に幸と存じます。 終

昭和三十八年二月十五日
発行(毎月一回発行)
会費 一ケ年三百六十円
発行人 小田原史談会
編集人 機関紙編集部
発行所 小田原市幸一丁目
郷土文化館内
小田原史談会
印刷所 清水印刷株式会社

<p>高級陶器の店 小田原市緑1~103 小田原銀座通り</p> <p>株式会社 江島屋陶舗</p> <p>TEL(0465)5427</p>	<p>甘露梅 月の衣</p> <p>小田原駅前</p> <p>正栄堂菓子舗</p> <p>電話 5311 5312</p>	<p>寝具の店</p> <p>花田屋</p> <p>小田原銀座2 電話 3788番</p>	<p>カメラ・写真用品 なんでも揃う</p> <p>カメラの光輝堂</p> <p>小田原駅前 TEL 5965 4859</p>
--	--	--	---

<p>プラスチック 成型加工</p> <p>東海化成株式会社</p> <p>取締役社長 滝本友信 電話 小田原五九二七番</p>	<p>資生堂ホールセール(特契店) ベルマン、パピリオドール、マ ナー、キャロン婦人靴下代理店</p> <p>株式会社 山一商店</p> <p>小田原市井細田428 電話 3553</p>	<p>建築金物 家庭金物</p> <p>株式会社 星崎仲吉商店</p> <p>小田原市多古412番地 電話 2718</p>	<p>畳表・日用品 問屋</p> <p>茶利商店</p> <p>小田原市多古25 電話2341・2374</p>
---	---	---	---

<p>御料理 仕出し 御弁当</p> <p>株式会社 東華軒</p> <p>代表取締役 飯沼相三郎</p> <p>小田原駅前 TEL(0465)5061~2</p>	<p>純良医薬品</p> <p>株式会社 オダワラ薬局</p> <p>錦通り電三、〇四八</p>	<p>化粧品 おしゃれ彩華</p> <p>松屋</p> <p>小田原錦通り 電話三三三三六</p>	<p>銘菓 松風 千代菊 銘菓 甘露梅 銘菓(県指定の店)</p> <p>電話 2376</p> <p>集栄堂本店</p>
---	---	--	--

<p>平野商会</p> <p>平野久雄</p> <p>小田原市十字三 電話(〇四六五)二四四九番</p>	<p>写真</p> <p>イガラシ</p> <p>小田原市幸3 TEL2534番</p>	<p>趣味の陶器</p> <p>江島屋</p> <p>小田原箱根口 電話6602</p>	<p>船志澤</p> <p>TEL3131</p>
---	---	---	----------------------------------

<p>印刷物は</p> <p>弘英印刷へ</p> <p>小田原市井細田八一 電話四、一〇八番</p>	<p>明るい生活 楽しい読書</p> <p>八小堂</p> <p>小田原駅前 TEL5388~9</p>	<p>小田原報徳 自動車株式会社 太陽自動車 株式会社</p> <p>代表者 曾我律之助</p>	<p>伊豆箱根鉄道株式会社</p> <p>大雄山線 運営事務所</p>
---	---	--	--

<p>あなたの洋品店</p> <p>はふや</p> <p>小田原幸町 TEL2307</p>	<p>株式会社 小田原百貨店</p> <p>社長 神戸英次郎</p>	<p>きそば庵</p> <p>小田原駅前 電話二八六二番</p>	<p>松坂屋製菓本舗</p> <p>小田原市十字二 電話五二七六番</p>
---	---	---	--